

せるところにある。

(永田和宏「十人の皆様江・へ読者」)  
「短歌の争点ノート」「国文学」二〇〇二・八

修復作業を永田は膨らむと捉えた。圧縮袋の中で夏を越した布団が秋の日に当たり膨らんでゆく場面をイメージすれば良さそうである。〈読み〉を得て、三十一文字が文字数を増やしてゆく。確かにその通りだと思ふ。しかし永田の発言の危ういところは「読者を感動させる」という点にある。読者が感動を求めて、感動する方向に勝手に〈読み〉を導いてしまつてはいけぬ。前述の自由な解釈も同じような危険を孕んでいる。残された三十一文字に忠実に修復は行われる必要がある。

三枝昂之は伊藤左千夫の「池水は濁りにごり藤なみの影もうつらず雨ふりしきる」を太宰治が入水前に色紙にしたためたこと、すなわち辞世にしたことを例にして次のように論じている。

短歌はエキス表現だから、純粹写生歌は置き場所を換えればいつでも心的な比喩になるのである。太宰はその機微をよく知っていたのである。エキス表現としての短歌の、その〈短かさ〉の豊か

さ〉を大切にすることが、つまりは読みの出発点なのである。乾燥したひじきや高野豆腐をゆっくり水で戻して味わうように、エキスとして表現された三十一文字をていねいに解きほぐす読みの丹念さが、すべての批評には求められる。三枝昂之「短歌批評の領域」短歌と日本人VI『短歌における批評とは』一九九九年 岩波書店

永田の「わずかな情報」を三枝は「エキス」とする。言葉のわずかな違いはあるが、言わんとしていることは同じ。ただ、「わずか」であっても、そこには情報が凝縮されているはずなので、エキスと言つたほうがしっくりくる。

〈読み〉には対象となる短歌作品を探し出す行為も当然含まれている。共犯の話に戻れば、コソ泥でなく怪盗の目標を見つけ出す目利きになる必要がある。共犯者になるに相応しい優れた歌を、数ある歌の中から見つけることが〈読み〉の第一歩と言つていいだろう。そのためにはもちろん〈読み〉の力を持つていなければならない。卵が先か鶏が先かの話みたいになつてしまふが、歌を選ぶことが出来なければ、三枝が言う〈短かさの豊かさ〉を味わうことが出来ない。

〈読み〉の対象は意味に限らない。調べや響きも読むべきであろうし、比喩・枕詞・序詞といった修辭も読む必要がある。一首を連作や歌集の中で、あるいは一人の歌人の中で、更に大きく短歌史の流れの中で読むことも有り得る。また〈読み〉は通常一人で行うが、数人で行う場を歌会と呼ぶ。歌会は共犯者の集まりである。最後に良い共犯者による〈読み〉の一例をあげておきたい。読まれているのは、

噴き出する花の林に炎えて立つ一本の  
幹、お前を抱く 佐佐木幸綱『夏の鏡』

実景の歌ではない。「花の林」は女の肉体の中にある。女はその内部に、噴出する花のエネルギーをたたえて炎えているのだ。女を抱くことは、したがつて、女の内部の自然を抱きとることを意味する。抱いた瞬間、男もまた「噴き出する花」の洗礼を受けて充電するだろう。(以下略)

菱川善夫『菱川善夫著作集1 歌の海』

二〇〇五年 沖積舎